

JICA ボランティア シニア 千葉

SV ニュース 第13号

平成二十二年度 公開講演会開催

平成二十二年度公開講演会
および通常総会が五月二十二日(土)午後一時より四時三十分まで、千葉市国際交流プラザ(千葉中央ツインビル二号館八階)にて開催されました。



(独)国際協力機構 国内事業部長 吉田 丘 氏

第一部の公開講演会では品川会長の講師紹介のもと、JICA国内事業部長の吉田丘(ヨシダ タカシ)氏が「JICAとボランティア事業」と題して講演をされました。

吉田 丘氏は一九五二年生まれで、鳥取大学農学部を卒業後、一九七六年国際協力事業団に入団されました。国



パラグアイ共和国特命全権大使 豊歳 直之 氏

際協力事業団では一九八七年にタイ事務所へ赴任、一九九七年にはミャンマー事務所長を務められました。国内の部署では二〇〇六年国際緊急援助隊事務局長、二〇〇八年から国内事業部長に就任されました。

次いで及川幹事が講師紹介に立ち、パラグアイ共和国特命全権大使の豊歳直之(トヨシ ナオユキ)氏に「パラグアイの日系社会」と題して講演をお願いしました。

豊歳直之氏のご略歴は、一九三六年に日本で誕生され、一九五八年早稲田大学第一政治経済学部を卒業、一九六九年にパラグアイ共和国に移住、現地国籍を取得しております。

平成二十二年度定例会日程
日時 十二月四日(土)
十三時~十六時
引き続き懇親会を予定
会場 千葉市国際交流プラザ

南米でのお仕事は一九六〇年にブエノスアイレスにあるS. Tsuji S.A.に勤務、パラグアイに「移住後はToyotoshi S.A., Transmar S.A., Transporte Fluvial Paraguayo S.A.その他七社を設立し会長や社長をされております。また、同国でNPO法人十一団体の会長や理事長をされています。

弊会会員がパラグアイで活動中に多大のお世話を頂いた方が、日系二代目の駐日特命全権大使として二〇〇九年十月に日本に赴任され、弊会の行事に親しくお話し頂けるのは素晴らしい機会でした。

吉田 丘氏のご講演要旨を第二面に、豊歳直之氏のご講演資料を第三、四面に掲載しております。



本年4月に千葉県総合企画部国際室長に就任した石井でございます。

千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様には、日ごろより本県の国際協力事業に御理解と御支援を賜り、誠にありがとうございます。また、貴会には、講演会の開催や国際理解促進講座への講師の派遣等を通じて、県民の国際理解の増進にも多大な御貢献をいただいております、心から感謝申し上げます。

JICAシニアボランティア ニュースに寄せて

千葉県 総合企画部 国際室長 石井 健一

近年では、国際協力のニーズも多様化、複雑化しており、各国・地域のそれぞれの実情に合わせた、きめ細やかで機動的な対応が求められており、地域や個人レベルでしかできない国際協力へのニーズが非常に高まっています。このような中、本県には環境や社会福祉、医療等の分野で様々な課題を解決してきた経験や、皆様方のようなすぐれた技術や知識をお持ちの方々など、国際協力を進めていく上での豊富な「資源」がありますので、それらのポテンシャルを最大限に活用していくことにより、幅広い国際協力事業の展開が可能になるものと考え

ています。そこで、本県では、市町村、JICA、ユニセフ、NPO等の各関係機関と連携し、国際協力の輪を県内に大きく広げていくことを目指しています。その一例として、JICA草の根技術協力事業(地域提案型)を活用して、ベトナムでの下水道・水環境教育分野での人材育成事業や工業教育における相互交流事業(教育庁)を実施しています。この中で、専門知識を有するスタッフの現地への派遣や研修員の受け入れ等を通じて、ベトナムの水環境改善や工業教育の進展に資する事業を展開しています。

さらに、このような千葉県国際協力事業を紹介する広報活動にも取り組んでいます。本年六月に開催した国際協力パネル展や来年二月に開催予定のグローバルフェスタ Chiba等を通じて、国際協力の裾野を広げていきたいと考えています。

今後とも県内の各機関や県民の皆様との連携のもと、「千葉の国際協力」をより一層推進していく所存です。で、千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様方におかれましては、本県の国際協力推進について、引き続き御理解と御支援をよろしくお願いいたします。

講演会「講演内容」

JICAとボランティア事業
(独)国際協力機構
国内事業部長
吉田 丘氏



JICAは二〇〇九年十月の統合後、従来実施をしてきた技術協力事業や無償資金協力事業とJICAの経済協力部門で実施されてきた円借款事業の三事業を一体的に実施する体制になり、事業予算も飛躍的に伸びました。しかしながら一般的に言えば、ボランティア事業や草の根技術協力事業を含めたNGOとの連携事業に関する予算はそれほど大きな額になっていないとは申せません。即ち、その予算の割合も全体予算の何十分の一であり、今後その規模について議論が必要と個

人的には考えております。また、『国際協力を日本の文化』に、という言葉がございいますが、これを実行推進していくためには、皆様がODAをこれまで以上に良く理解をして戴くこと、またJICAをより一層理解して戴くことが必要であると考えますが、昨年から本年にかけての行政刷新会議の事業仕分けで明らかになりましたように、まだまだ一般の市民の方々のご理解が必ずしも十分ではないということも否定できない事実であります。

そういった状況の中で、JICAは広報をより強化し、更にはタックスペイヤーの方にしつかりと説明が出来、公平性を担保し、情報公開も進めて透明性をより増し、かつ限られた予算で最大級の効果を上げるべく日々努力をしております。

シニアボランティアのOBの皆様方がこのような会合を定期的に開き、一般の市民の方々に開放し、または参加を得て、ご自分達の体験、ODAやボランティア活動について広く世間の方々に広めて戴くという機会は大変に貴重であり、JICAにとっても有用であると考えております。消費税値上げも議論され始めた財政再建の中でのODAの実施は、現実的に見て、必ずしもこれまでのような訳に

は行かないということは自明ですが、この地球上で日本一国だけでは成り立ちえないということが当然のことである以上、ODAの必要性やボランティア活動の必要性は、厳然として存在いたします。そういったことを市民の目線で見ている中で、皆様方の千葉県での活動は極めて重要な意味を持つのではないかと考えて居ります。

(現 東京医科歯科大学 特任教授)

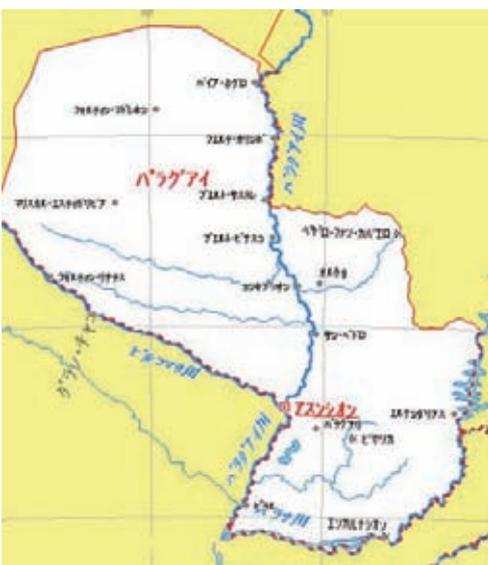
パラグアイ共和国と
日系社会
パラグアイ共和国
特命全権大使
豊歳 直之氏



昨秋着任されたパラグアイ共和国 特命全権大使 豊歳直之氏より、「パラグアイ共和

国と日系社会」の演題で、ご講演を頂きました。パラグアイ共和国は日本と九十年間の外交関係があり、現在約九千人の日系人が在住しているなど、日本と親密な関係にあります。今回、親しくご講演を頂

き、聴衆一同はパラグアイ共和国での日系人の貢献努力に対する認識を新たに、農産物供給国としての重要性を再認識しました。豊歳大使閣下よりご講演資料を頂戴しましたので、皆様の参考に供します。



地図(上)パラグアイ (右)南米
外務省ホームページより転載(編集担当)

パラグアイ共和国

歴史 一五二四年ヨーロッパ人（ポルトガル人）の Alejo Garcia が金を求めてパラグアイに来る。（ポルトガル人の種子島に漂着は一五四二年）

一五三七年八月十五日にはアスンシオン市を築き、ここから北上してポリビア、ペルーに到達せんと試みるが、既にペルーには別のルートよりスペイン人が到達してインカ帝国を滅ぼし、金を略奪していた。パラグアイのスペイン人は当時農耕民族の原住民を使用し、食料の調達を確保、やがてはこれらの原住民と結ばれ（上下関係あり）、メステイツソ社会を形成して行く。

一八一一年五月一日には独立を果たしたが、当時は領土も広く、南米でも豊かな国で、日本の新橋横浜間の鉄道より前に鉄道が敷かれ、国内製鉄所で造った鉄板で南米最初の造船をも手掛けていた。

一八六四年から七〇年のブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの三国戦争でマリスカルのロペス大統領を初めとする十五歳以上の男性が全滅、国土の多くを失う。残った女子供達が国造りに立ち上がった。これで女性は働き者という伝統が残った。（大政奉還、戊辰戦争、明治維新は一

八六七年、ハワイ移住開始は六八年）

面積 四十万平方km、日本の約一・二倍、パラグアイ河を挟んで、東と西の地域に分かれ、東は農林業に適し人口の大半が住んでいる。西の地域は面積は東より広く全面積の六十割を占めるが、人口は二・六割。灌木地帯で土地は塩分を多く含む牧畜に適す。

人種 欧州人（スペイン人）と先住民との混血が九七割、欧州系二割、その他一割（内日本人〇・二割）人口は六百二十万人、人口増加率は二・六割

言語その他 スペイン語、グアラニ語が公用語である。国旗二種（裏表が異なる）、領土二個（東西）、河川二本（パラグアイ河、パラナ河）独立記念日二日（五月十四、十五日）がある。

政治 一九五四年より三十五年間、ドイツ系二世のストロスネル大統領の独裁政権、大の親日家であったが、人権問題（赤狩り）や腐敗政治が顕著であった。（明治天皇を信奉しており、明治天皇の崩御の年に自分が生まれたので天皇の化身とまで言っていた）

た。

新大統領ルゴは元カトリック司教で、中道左派。女性問題もあり。また、直接国民投票で選出された大統領は党派を持たず、ルゴを担いで政権に就いた与党も纏まらず、政権を手放した野党も各派に分かれて、政情は不安定。

経済（主要産業）

《農業》 本年の大豆生産量一千万ト（米国、ブラジル、アルゼンチンに次いで世界四位）。日本の大豆輸入元として、パラグアイは五十七万ト（二〇〇八年）で米国に次いで二位である。非遺伝子組み換えのパラグアイ産食用大豆の輸入は一十ト程度だが、日本は今後五年間で九千トまで増加する計画をたてている。そして、将来的にはパラグアイを日本の食糧供給基地の一つとすることが考えられている。

食用白ゴマの対日輸出は年間三万トで、日本の白ゴマ需要の約六割を占めている。

《牧畜》 牛の頭数は人口の倍にあたる千二百万頭、熱帯に強いセブー種と味の良いヨーロッパ種の交配品種で食肉が改良され、輸出が飛躍的に伸びている。口蹄疫はワクチンで防止されているが、清浄化されておらず、日本への輸出はできない。

《電力》 世界一の規模を誇る

イタイブダム発電量の内、パラグアイの消費量は五割だけで九十五割をダム共有者のブラジルに輸出している。輸出価格が不公平であり、目下交渉中。チリなど第三国への販売についても交渉中である。

一人当たりGDPは千九百ドル（日本は三万二千ドル）で経済振興の夢が多くても実現が難しいのはデイズニード並みといえる。

日本との関係 一九一九年十一月十七日に外交関係を樹立し昨年は九十周年に当たる。

一九三六年に日本人移住開始。（一九三四年ブラジルが日本人移住の門戸を開かず）

一九五〇年代に戦後の日本政府の計画移住が始まる。移住者の苦難の歴史を経て現在約九千人の日系人が在住。最初はトマトなどの野菜の栽培でパラグアイ人に野菜を導入する。近年は日系人がパラグアイ農業第一の大豆の生産に貢献する。（パラグアイで最初に大豆を栽培したのは日本人農家。）日本人は絶大の信用を受けている。

一九五六年からの日本からの有償（借款）、無償（贈与）、及び技術協力は二千四百億円に上り、日本が長年に亘り経済支援国のトップ。

日本人移住者の活躍と、日本の経済、技術援助により両国関係は非常に良好であり、パラグアイは世界有数の親日

国と言われる。（元日本人が駐日パラグアイ大使）。国際場裏における協力の場でも日本の政策に大変好意的である。（安全保障常任理事国、サッカー世界カップ開催国を支持している）。ちなみに南米サッカー連盟本部はパラグアイに在り、連盟会長は長年パラグアイ人が務める。

皇室との関係も深い。

一九七八年 皇太子同妃両殿下（現天皇皇后陛下）

一九八六年 常陸宮同妃両殿下（移住五十周年）

一九九九年 高円宮同妃両殿下（サッカー南米選手権―日本特別招待）

二〇〇六年 秋篠宮殿下（移住七十周年）が訪問され、両国関係の親善を深められた。

日本人移住の歴史

《戦前》

日本人の海外移民の歴史は『排日の歴史』ともいわれ、一九三四年にブラジルが日本人移民に対して過去の実績の二割という二分制限法を成立させ、事実上日本人移民の門戸を閉じたため、一九三六年に日本人移民を受け入れたパラグアイ移住が始まる。第一回移民十一家族、八十一名が入植地 La Colmena に到着、一九四一年に第二次世界大戦で中断するまでに百二十五家族、七百八十名が入植してい

る。La Colmena 移住地では棉花を栽培し、当時はパラグアイ綿の九十五割を日本人が生産していたと言われる。ただ、移住者の生活は厳しく、ブラジル、アルゼンチンへ再移住する者も続出した。

第二次大戦中は日本人は枢軸国民として様々の制約を受けたものの、パラグアイ政府は概して寛大で、北米やペルーのような排日の動きはなかった。そして、終戦の年には大旱魃、翌年からは数年に亘りバッタの大群で大きな被害を受けている。

《戦後》

一九五四年に戦後の移住が始まり、一九五九年に日本政府はパラグアイ政府と移住協定を締結、大規模な日本人集団移住地が建設される。この協定により戦後日本から七千人がパラグアイに移住することになる。更に、この協定は三十年後の一九八九年に更新され、八万五千人の日本人移住枠を無期限に認めている。

日本政府の国策としてパラグアイ移住事業を行ってきたのは次の組織である。

- 一九五三年 日本パラグアイ 拓殖組合
- 一九五四年 海外協会連合会
- 一九六三年 海外移住事業団 (海外移住復興会と合併)
- 一九七四年 国際協力事業団
- 二〇〇三年 国際協力機構 (JICA)

日本人移住地の形成

一九二二年 Asunción にアルゼンチンに在るタンニン会社の社員として最初にパラグアイ北部の Puerto Casado に来たのが佐幸田兼蔵。福岡庄太郎が Asunción に住んだ最初の日本人(一九一六年)で市の中心部で花屋を開いた。その後、移住地から都市への都市化現象で日本人も移り住む。一九五七年には日本公使館が開設され、日系社会にとつても首都となる。一九八六年に移住五十周年記念、一九九六年には六十周年、二〇〇六年には七十周年が Asunción にて開催される。日系諸団体の本部は同じく Asunción に在る。

一九三六年 La Colmena 戦後は一九五四年に入植して果樹栽培。

一九五五年 Federico Chaves に九家族五十九名が原始林へ入植、後にウクライナ人、ドイツ人など国際色豊かになる。

一九五五年 Encarnación は戦後最初の移住者が通過した町で、戦後移住の玄関口、その後に移住地を離脱した日本人が商工業に従事する。一九六四年には日本領事事務所開設される。

一九五六年 Fram 移住地フジ、La Paz、Santa Rosa の原始林の陸の孤島に入植、広島県沼隈町五家族三十名も加わ

る。

一九五八年 Stroessner 移住地(現 Ciudad del Este)に日本人入植。Este 市はイタイブーダ水力発電建設と共に発展し、日系人の多くが商業に従事する。

一九五八年 Pedro Juan Caballero に三十八家族二百六十名に続き百三十七家族九百八名がジョンソン耕地にコーヒー栽培のため契約農民として入植。自由が拘束され、苦難の道を歩んだが、雇用主のジョンソンは一九五九年に倒産した。自営でコーヒーを栽培するも、大霜害で全滅するというギャングブル性の高い作物のため、その後、養鶏、養蜂、養蚕、台湾桐、ハッカ、果樹、蔬菜、ステビアなど営農転換を図るが失敗する。その後は製材、大豆栽培、商業に転職、ブラジル国境であるためブラジル経済に依存する。

一九六〇年 Alto Paraná (Pirapó) 移住地に二十六家族が、続けて一九六五年には三百三十一家族千七百七十七人が入植、日系最大の移住地になる。

一九六一年 Yguazú 移住地に Fram より最初に入植、一九六三年には日本より七家族、その後は年間十五家族が続いて入植、一九七三年には日本からの最後の移住者を迎える。ブラジル国境に近く、国

道二号線上にあり都市型移住地とも言える。

日系諸団体

- 一九七〇年パラグアイ日本人会連合会(日本語教育、九校の日語校)
- 一九七五年在パ日本商工会議所
- 一九七六年全パ日系婦人団体連絡協議会
- 一九七八年日系農業協同組合中央会
- 一九八三年パラグアイ日系老人クラブ連合会
- 一九八七年パラグアイ日系人会連合会
- 一九九七年パラグアイ日系社会福祉協議会
- 二〇〇一年在パ日本都道府県人会連合会
- 日系農業技術師会
- 日系医師会
- オイスカパラグアイ
- パラグアイ日本協会
- パラグアイ日本商業会議所
- JICA 帰国研修同窓会
- 日本パラグアイ学院

日本人農業

日系人農業従事者は約四千名、全パラグアイの〇・七割だが、大豆生産量の四・一割を占め、小麦生産の九・三割、アスンシオン中央市場に入荷する鶏卵の九十割は日系人の生産するもの。

日系人のパラグアイ中央政府への進出

- セグンド ウダガワ
- 商工省次官
- エドワルド キシ
- 電話公社総裁
- ケイカナサワ
- パラグアイ陸軍最高司令官
- アレハンドロ タカハシ
- 石油公団総裁

日系人の全人口に対する割合は〇・二割だが、その他大勢の日系人が活躍している。

日本人の農業移住の特異性

パラグアイでは大規模集団移住が主流で、入植者は自営開拓農(ジョンソン耕地契約移民を除く)。原始林を開拓した奥地農業が主である。

以上



収穫前の大豆畑 (Itapúa)

平成二十二年通常総会

公開講演会に引き続き、平成二十二年通常総会が開催されました。



会場風景 (会長挨拶)

まず、司会の黒田副会長の開会宣言と来賓紹介が行われました。参加会員は出席者三十六名、委任状提出者二十七名でした。



高庄 卓也氏



中村 耕太郎氏

品川会長挨拶のあと、JICA地球ひろば所長貝原孝雄氏(JICA千葉デスク) 明石絵里子氏(代読)、千葉県総合企画部国際室国際協力グループ長中村耕太郎氏、JOCV千葉OB会事務局長高庄

卓也氏の各来賓よりご挨拶を戴きました。

議事は、品川会長の議長の下に次の議題が上程され、それぞれ原案通り可決されました。

- 「平成二十一年度活動報告」
- 「平成二十一年度会計報告」
- 「会計監査報告」
- 「平成二十二年活動計画案」
- 「平成二十二年予算案」
- 「平成二十二年役員選出」

また、「国際理解(開発)教育」を横田幹事が、「広報およびホームページ」を山本副会長と白鳥ウエブマスターが現状と今後の方針を報告しました。

引き続き、司会の黒田副会長より次回の帰国報告会(七月



総会ご挨拶
会長 品川洋之助
二〇〇三年創立から七年目を迎え、県内国際交流団体、JICAおよびJOCV内での弊会の存在感が高まっています。会員数も九十五名となりました。

各会員は開発途上国に赴きボランティア精神を最大に発揮、多大な貢献をされました。そして帰国後はJICAとの密接な関係を維持しつつ、「JICA応援団」として市民レベルでJICAの機能・活動の紹介、とりわけシニアボラ

十一日)のお知らせを行い、津田事務局長より新会員として武松 敏弍氏(欠席)、中村 時夫氏、吉原 久雄氏(欠席)と今春帰国者 丸島 賢氏(欠席)、そして再派遣帰国者の品川 雅子氏(欠席)、反畑 幸治氏(欠席)が紹介されました。

議事書記は大久保 邦衛氏と羽関 総一郎氏が担当され、閉会宣言は山本副会長でした。

総会終了後、会場近くの「美弥和」にて懇親会を行ない盛会でした。

役員人事

本通常総会で平成二十二年役員(案)が承認されました。新任 大久保 邦衛氏、退任 増田 定雄氏です。各役員

ンティアの応募促進に貢献してこられました。

弊会では新たに帰国し、同じ志を持っておられるシニアボランティアと情報を共有するために、現地でご活躍中のシニアボランティアの皆様へSVニュース、ホームページ、電子メールを通じて情報を発信し続け、将来の日本の海外援助発展の為に社会還元、社会貢献のため献身的な協力を行っていきたくと考えております。

の担当は次の通りです。

- 会長 品川 洋之助
- 副会長 山本 茂穂
- 同 後藤 優
- 事務局長 津田 正臣
- 幹事 横田 勝徳
- 同 酒井 國彦
- 同 及川 淳一
- 同 大久保 邦衛
- 同 黒田 昭太郎
- 会計監査 黒田 昭太郎



新任
大久保 邦衛氏
(チュニジア 水産物加工)
よろしくおねがいします。



退任
増田 定雄氏
ご活動ありがとうございました。

増田さんは平成十八年に幹事に就任され、主に国際理解(開発教育)活動を担当されました。「多文化共生・異文化理解の第一歩は世界の国々の真実の姿をしるること」をキーワードに出前講座の推進、小中学・高校生に世界の国々の姿を知ってもらい、これらを通じて地球規模で日本と世界を考える人々の育成に貢献されました。

会員動静

(平成二十二年八月三日現在)

○会員現状

会員数 九十六名

○会員異動 (本年三月以降)

入会者 四名
退会者 六名

○再派遣活躍中の方々

(再派遣順 敬称略)

- 須郷 隆雄 (エクアドル) 経済・市場調査
- 小松 秀世 (グアテマラ) 水資源開発
- 加藤 哲男 (シリア) 食品分析
- 鈴木 岳 (カンボジア) 都市計画
- 木内 良郎 (メキシコ) 溶接
- 田中 忠昭 (ベトナム) 農産加工品販売促進
- 高木 利公 (タイ) コンピューター技術
- 武藤 達雄 (ペルー) 電子工学
- 大澤 トシエ (シリア) 服飾デザイン
- 渡辺 章 (ミクロネシア) 保健師
- 寺島 得司 (エルサルバドル) 上下水道
- 吉原 久雄 (トンガ) 農業生産技術
- 柿沼 豊 (モルディブ) 体育(柔道) (短期)
- 濱崎 丘 (ミクロネシア) 環境教育 (短期)

第九回帰国報告会



帰国報告会会場

平成二十二年七月十一日(日)午後一時三十分より四時迄の間、千葉県JICAシニアボランティア第九回帰国報告会がJICA地球ひろばと当会の共催で浦安市国際センターにおいて開催されました。今回は平成二十年秋、二十二年春帰国の四名の方々による報告が行われ、特別話題提供としてJICA千葉デスク

明石絵里子国際協力推進員による「JICA千葉デスクの業務紹介」とJOCV時代の任国であった「キルギス共和国事情」について報告がありました。

来場者は四十名を越え、会場の浦安市国際センター研修室はほぼ満員の盛況でした。冒頭にJICA地球ひろば貝原所長のご挨拶を頂き(JICA千葉デスク 明石国際協



品川会長挨拶

力推進員代読)次いで品川会長の挨拶の後、後藤副会長の司会で進行しました。

品川会長挨拶 豊富な図表と写真を使った熱心な報告が続きました。一般市民の方々、浦安市国際センター関係者、青年海外協力隊千葉OB会メンバー、および当会会員の皆さんが熱心に視聴され、報告者が派遣された国々に対する関心が一層高まった様子でした。



豊富な図表、写真を用いた報告風景

内容豊富な報告により、結果的に質疑応答時間が少なくなるなど、次回以降の帰国報告会への検討課題となりました。

今回報告された方々のお名前、演題、報告の要旨は次の通りです。

通ります。 (要旨の文責は編集担当)

河田 眞智子氏(ネパール/ソーシヤルワーカー) 「ネパールでの幼児教育」



ネパール・ラリトプル市役所地域開発部に平成十八年十月より平成二十年十月まで配属され、地区運営の四か所の幼稚園の巡回保育指導にあたりました。

対象は低所得層の子供たちで、教材もなく、いきなり日本式の保育では受け入れてもらえないので、実践可能な基本的日常生活指導(手を洗う・拭くなど)から始めました。教材も工夫をして、ありあわせの物で子供達が楽しく遊べるようにしました。先生達の意識を変えてもらう事と子供と一緒に遊ぶことで情緒、認知、表現などの側面を伸ばして行く大切さを指導しました。

帰国後、毎日のようにネパールを思いだしており、出来なかつたことも出来るようになるか、と今一度、行きたいと願っております。

大西 輝明氏(コスタリカ/環境教育・環境管理) 「コスタリカにおける環境管理」



平成二十年一月から平成二十二年一月にわたり、前期はコスタリカ共和国環境エネルギー通信省ACCVC支所において、一般環境管理や環境問題解決のためのアドバイス、を行い、後期はナショナル大学森林サービズ研究所において地球環境問題に関する環境教育や研究に係りました。

さらにナショナル大学において調査した大学生の環境社会意識結果を提示し、ヨルダンおよび日本の学生のそれらとの国際比較結果を示し、問題提起を行いました。

中村 時夫氏(パラオ/学校運営) 「素敵なパラオの人々」



平成二十年三月から平成二十二年三月までパラオ共和国教育省に派遣され学校運営に関する指導・助言を

行いました。算数・数学のカリキュラムの改定、研究授業の指導と助言、掛け算九九の全校一斉テストの実施、先生方の計算力向上への取組などがその項目です。

これらの活動の結果、教員、学生の計算能力の向上に多大の効果が見られました。パラオの人々との交流も出来、いろいろの素晴らしい経験をさせて頂きました。

丸島 賢氏(ペルー/機械工業) 「ペルー・アレキツパ職業訓練校指導活動」



平成二十年三月より平成二十二年三月までペルー共和国工業関係職業訓練センターにおいて自動車部門ディーゼル機関についての指導を行いました。

自動車用ディーゼル機関の燃料システムの各種項目について、その理論と実技・テクニクを選定を行いました。技術移転の対象は同センター自動車科教員とディーゼルエンジン担当者四人で、彼らは指導した技術を習得し、生徒に教えることが出来るようになりました。

一般市民の参加者から、次のようなアンケート回答が寄せられました。

- ・シニアの皆様が海外で頑張ってきた事を知ることが出来て大変元気づけられました。
- ・それぞれの国で体験されたことを話され、それぞれ努力されたことがよく分かりました。
- ・スライドを使った具体的な説明で、それぞれの国について理解が出来ました。
- ・いづれ海外ボランティアに行きたいと考えていますが、具体的に行くまでに準備しておくこと（語学等）を教えてください。

- ・個々の体験談の他に、JICAに応募した動機などを語っていただければ、より発表の中心にリアリティがあると思います。
- ・各国事情、講師の方々のご苦労、ご活躍がよく理解できました。キルギス事情はもう少し詳しくお聞きしたかったです。

- ・ボランティアの皆様の素晴らしい活躍をもっと上手に一般市民の人々に広く知らしめることは大事だと思います。
- ・楽しいJICAボランティアの発表でした。今後も続けて頂きますようお願いいたします。

特別話題提供



JICA千葉デスク
国際協力推進員 明石絵里子氏

『ご出席の皆様への話題提供として、国際協力推進員としての自分の役割の説明、青年海外協力隊員としての赴任国キルギス共和国で今春起きた反大統領デモと民族紛争の背景にある国の概要、キルギス人の特徴などについてお話をいたしました。』
(十二頁「CCCB便り」に
関連記事があります)

閉会后、有志による懇親会が最寄りの「やるき茶屋」で行われ、報告者を変え、親睦の時間を過ごしました。



会員寄稿

インカの末裔の国ペルーに暮らしてみても

武藤達雄



ペルーは勿論、南米には、初めて来た。日本からは非常に遠く、

クスコやマチュピチュは知っているが、現在住んでいるアレキップの町などは、かなり旅行好きな方々や仕事等で来られた方しか知らないのではないだろうか？

日本では、残念ながら、英語ほどスペイン語はポピュラーでない為に、これまで、私はほとんど南米には関心がなかった。でも、やはり、こちらに住んで見ると大変面白い。即ち、公用語がスペイン語だけでなかったり、独立にまつわる話や1000 B.C頃古く数々の歴史があること、特異な地理、こちらにも太平洋戦争があったこと、ソ連との友好な時代があったため、現在もペルー軍は基本的には東側の装備であること、肥料に適していた海岸部のグアノ(海鳥の糞からなる硝石資源)から生み出された富によって鉄道や電信などが敷設された

こと、日系ペルー人は約八万人いるが、アレキップでは、観光客以外に日本人に会わないこと等々である。



コンピューター教材開発

さて、そのペルーの南部のアレキップ(ペルーの第二の都市)にて、このSENA TI(職業訓練機構(学校))で、マイクログンピュータ関係について、先生方のお手伝いを行っています。二月から本格的な活動を開始し、四月末に第一回目のレポートをカウンターパートに提出しました。テーマは八ビットパソコンを使用したトレーニングキットで、教材が陳腐化し、全面的に見直す作業でした。旧式のパソコンでしかプログラミング出来ない状態でしたが、これをUSBメモリーを経由してWINDOWS XP、VISTAでコミュニケーションが取れるようにし、初心者向けマニュアルを作成しました。USBコミュニケーションでは、最初うまく行かず、

メーカーの技術者とメールのやり取りで何とか解決できました。今更ながらインターネット社会に感謝です。マニュアルは、日本語↓英語↓(翻訳ソフト利用)↓スペイン語の作業が大変でした。出来上がったスペイン語版を3人の先生方に添削をお願いしたら、原稿が真っ赤になっ



職業訓練学校の先生方との打合

アレキップの町については、柏市のホームページ内に掲載して頂いております。

(http://www.city.kashiwa.lg.jp/cityhall/sosiki/B_KIKAY/KIKAY_KOH/KOH_KOK/JICA04.htm)

ここで生活している一番困るのは、全然雨が降らず、非常に乾燥していることです。それで、生活用水はどうなっているかと言うと、町の北側と東北にあるChachachi山(6075m)とMt.Sti山(5821m)に降る雪どけ水を利用している為に、約九十万人の人口でも全然問題ないようです。冬より

も夏にかけて山頂は多くの雪に覆われます。五月の中旬位から五十割以上あつた湿度が、現在は平均三十割を切っています。一番乾燥した日は九割を記録しました。ほとんど砂漠並みの湿度ですが、最高気温が二十℃前後、夜間が十℃前後で、砂漠ほど温度変化はありません。昼間は半袖シャツ姿も見かけますが、夜になるとセーター、コートが必要で、乾燥していて良いことは、洗濯物が一〜二時間で乾くこと、生ごみを貯めておいても腐敗が進まなく、蠅やゴキブリが発生しないこと。困ることは、静電気、乾燥肌となること。特にご婦人方は肌の手入れが大変です。手足にアカギレが出来、炊事やワイシャツの釦が止めにいくこともあります。

ボランテニア活動の息抜きは旅行です。ペルーは世界遺産が十一ヶ所もあり、我が町アレキツパも文化遺産に登録されています。六月末の休日を利用して、クスコ、マチュピチュ、チチカカ湖に行ってきました。マチュピチュからチチカカ湖に到る谷は、インカの遺跡の宝庫で、どこを掘っても遺跡が出てくるような所です。この旅行で印象に残ったことを一点だけ記しますと、チチカカ湖に面した町プーノからボートで約四十分の所にあるウロス島に行った

ことです。

この島はトトラと呼ばれる葦を積み重ねた「浮島」で、大小四十程の島が浮いており、約七百人が住んでいます。観光で生きており、その村長さんが島のメンテナンス（葦の定期的な交換）や生活について説明してくれました。その中で、フジモリ前大統領のみがこのウロス島に来てくれ、太陽光発電（パネル）を寄付してくれ、今や島内で電灯は勿論テレビも見ると欧米人観光客の前で説明しているのを見て、間接的に誇らしい気がしました。



島も船もトトラで出来ている

これからも、精々ボランテニア活動も頑張り、時間的に、精神的に言葉（スペイン語）の上からも余裕が出来たら、残りの世界遺産巡りにも挑戦したいと思っています。

**ミクロネシア連邦国の
ゴミ処理指導**
濱崎 丘



私は二十一年度ミクロネシア短期SV（廃棄物対策）としてミクロネシア連邦国のコスラエ州で活動しています。

コスラエ州とは？

太平洋に浮かぶミクロネシア連邦は四州から成り、その中の一州、コスラエ州は面積百十平方km、人口八千人弱で四州の中でもっとも小さな島となつています。赤道に近く、年中太陽が頭の上にあるいつも真夏のようなです。一方、年間四千mmもの雨量があり、熱帯高温多湿の世界でもあります。

活動場所とは？

私が勤める部署は「交通インフラ局」で、州の空港、道路などのインフラの構築、保全を担当しています。この敷地内に最終ごみ処分場があり、この処分場の運営指導が私の役割です。

最終処分場は準好気性埋立て技術（福岡方式）を取り入れた構造で今年から本格的な運用に入っています。赴任前は、食物の食べかすなどの山を想像していたのですが、現実にはプラスチックと紙が大



赴任当時の最終処分場
(プラスチック類と紙の山)

半を占めていてびっくりしました。

活動とその結果は？

私の活動は、処分場の実態を把握・分析し、それに基づく改善提案から始めました。

コスラエ州でのごみ処分は、①粗大ごみ、②分解性有機物、③非分解性有機物、④ビール缶などを扱うリサイクルセンターの四種に分類されたシステムで運用されています。この内、最終処分場を持ち込まれるのは上記②と③を中心としたプラスチックや紙類で、これらがゴミ全体の約八十割を占めますが、逆に残飯などの食料は、まず豚の飼料となる関係上、最終処分場には少ないことが分かりました。従つて処分場では微生物の活動も不活発でメタンガスも発生しておらず、そのためごみ処分場特有の匂いもきつくはありません。

実際の活動では、まず処分場の排水の仕組みについて改



覆土後の最終処分場
(前写真と同場所)

善点を取り上げました。処分場から出る排水は二つの排水池を通り、最終的にマンダローブ林に流れる仕掛けとなつていきます。しかしこの内、第一排水池のオーバーフロー分が第二排水地で吸収されないことがわかり、拡張提案をおこなうとともに、マンガローブ林へ放流する直前に活性炭を使ったフィルターを設置するよう提案もしました。その結果、彼らは第二排水池の容量拡大を決定し、またフィルターとしては活性炭を作る技術が無い為、サンゴ石でのろ過方式に踏み切りました。

また運用上の課題については、覆土の実施と、注射器等医療廃棄物の処置について病院内に焼却炉を設置するようお願いしました。

二〇一〇年二月に第一回目の覆土を実施しました。ごみの厚さが約一・五メートルに達した時点で覆土したもので、以降この厚さを目安に約十割の石混じりの土を被せることとなりました。



南国でしかできないヨットの操縦?も楽しみの一つです。

また病院では五年間焼却炉が休眠中でありましたが、新規に焼却炉を設置する検討が始まりました。ただし新設するまでには時間が掛るため、医療廃棄物の連邦ガイドラインに準拠した簡易焼却炉をこの八月末までに設置する暫定処置が取られました。

この件を契機に、今まで一自治体が対象であった処分場が、州内の四自治体のごみ処分場に統合化されることになりました。従来の平日の運用時間帯を三時間延長し、かつ休日である土曜日に対処できるように制度改善です。

価値観の相違からコミュニケーション確保に壁があり苦しんだ日々もありましたが、少しずつ環境が改善されてゆく様子、コストラエの人々が喜ぶ顔を見ることは、自分自身の活動の励みとなつています。

トンガ王国でのシニアボランティア活動

吉原 久雄



農業食糧森 林水産省に「農業政策アドバイザー」として赴任しております。

南極方面を背にしては、当地の七月

ウ五世の誕生日を祝う「ヘイララ祭り」が開催中です。ヘイララは樹の名前、その薄オレンジ色の小さな花は国花で、レイに使われます。

祭りはミス・トンガ選考、ブロックパーティー(大テントの中にステージを設置、生バンドの演奏、各種ダンス、広場に各種出店)、ミス・ギヤラクシー選考(ゲイ、市民権を得ています)、パレードなど。そして外交団が集まるディナーパーティーと続きます。十六日のブロックパーティーに日本チームはJ.V.(JICA協力隊員)が中心となって「日本の夏祭り」をテーマに参加、七夕飾り、ヨーヨー釣り、肥満度チェック(保健隊員達が来場者の身長体重を測り計数を出し、用紙に記録を書いて渡す。同時にデータを集める)などを行いました。在トンガ日本大使館は広報活動として、各種広報雑誌を配布、また民間の

「巻き寿司」店も出店、大盛況でした。時間は何と十八時から二十四時まで。

二十四日のパレードに向け、仕事終了後J.VとS.V(シニア海外ボランティア)が集まって、山車(ピックアップトラック)の飾り付け準備とダンスの練習に余念がありません。S.Vは裏方で

この時期七、九月は少し寒い時期にあたります。南(南極)からの寒い風が吹き朝の気温が十五、二十℃、日中は日射が強く三十℃近くになります。今年は雨が少ないので作物栽培は困り、市民は水不足を心配しています。一、三月は雨期で時々サイクロンが襲来、今年は二つ来て大きな被害が出ました。



日本向けサトイモ生産

さて、私は今年一月、トンガ王国の首都ヌクアロファに着任しました。農業食糧森林漁業省(以下農業省)で政務

次官に農業政策をアドバイザーする業務です。と言って私の知っている分野は農業生産、輸出農産物の振興と農業教育です。今までの経験から、役所だけの仕事では効果が上がらないと判断し、役所で半分仕事、民間大規模農場で栽培指導、輸出業者に貿易を指導、これが半分です。この方針は最初からJICAトンガ事務所と農業省に伝えて了解を得ています。

具体的には、「第一回トンガジャイアントカボチャコンテスト」を企画し農業関係者の結束と楽しさを伝え、日本にカボチャのメッセージを送ること。本格的な有機農業の紹介、農産物の品質アップのための栽培技術指導、日本の農産物輸入業者の紹介などを行っています。

南海の孤島トンガ、百年前ならば楽園だったのでしょうか、今は世界経済の荒波をモロに受け、時代の波に飲み込まれています。市民は現金収入が少ないのに物質的に日本と変わらない生活です。電気・家庭電化製品・衛星TV・インターネット・自動車・燃料・携帯電話などが必ずありますが、国産品は一切なく、全てが輸入品です。トンガの産業は農業と漁業があるだけ、これも足りているわけではありません。国民の経済は海外出稼ぎ者の仕送りで成

り立っているとのこと。世界経済が後退すると、在外トンガ人の収入が減りその結果「送金が減る」のです。国の税収はわずかなので、国家経済は海外諸国の援助が必要で。だから小さな政府、質素な政府です。農業省は最重要官庁の一つですが人員・建物と設備・機材など充分ではないようです。

地勢は、南太平洋に散在する珊瑚礁、火山島で百六十九の小島からなる島国(南北六百km、東西二百km)。首都は隆起珊瑚礁のトンガタプ島にあります。国土は小さく、六百九十九平方km(千葉県の約七分の一、対馬とほぼ同じ、東京二十三区より少し大きい)。人口はわずか十二万人。

治安は良く、警官はピストル・警棒を持っていません。でも時々泥棒・車上荒らしの話は聞きます。生活について、衣はほとんどの時期夏物で過ごせ、今の時期に朝夕のみジャンパーなど羽織るものが要ります。

食について、トンガ料理はイモ類が主食、肉魚を蒸し焼きするウム料理があります。私の日常食は中華系の食堂で食べるか、街の大やさい市場、港の魚市場、コンビニらしき店(華人系小売店で深夜まで営業)で食材を買い自炊です。肉類・酪農製品は



ミス・トンガと記念撮影
(左側が筆者)

この中でカボチャに代わる何か輸出農産物を育成したい、高品質野菜の生産技術の普及をしたい、という気持ちで働いています。



日本向けカボチャの播種
(中央が筆者)

ニュージールランド産が購入できません。住宅はコストが高いので、全体的には不足しているように、大家族と一緒に住んでいる場合が多いようです。公共の賃貸住宅はありません。一方裕福層の大邸宅も多くあります。私は平屋の三LDKの貸家に住んでいます。

会員活動報告

ダナン日本語センター
品川雅子(鎌ヶ谷市)



送迎を受ける筆者
(後部座席)

ベトナム ダナンの「さくら日本語センター」に赴任しております。日本も熱帯夜が続いているようです。

ダナンも連日三十度を超えています。雨季に入るようになると、激しい雨が降り、少し暑さがしのげる日もあります。

ベトナムの国土は日本の約九割の大きさで、南北に細長く、その中ほど海岸にダナンは位置しています。全人口は約八千三百万人。ダナンの人口は約八十万(二〇〇五年現在)の中都市です。

近くに世界遺産に登録された古都フエがあり、また十六〜十七世紀にかけて日本人町もあつた古い町並みが残るホイアン、五行山、ビーチなど風光明媚なところが多いようです。休みにはぜひ訪れてみたいと楽しみにしています。

また食材は豊富で海の幸、山の幸があり、珍しい果物もあり、困ることはありません。有名な麺類、フォー、ブンがあり、シーフード、肉類のスープといろいろな味が楽

しめます。魚や、肉のだしがよく出ていてコクがありおいしいし、安いです。現地の人は朝ご飯を屋台での外食で済ますそうので、フォー、ブン、おかゆ、またお強ご飯、赤飯も路上で売られています。昼休みが長く、学生もほとんどの人が家に昼ご飯を食べに帰るので十一時ころから交通ラッシュになりオートバイが激しく行きかっています。

交通はバイクか自転車で、学校の送り迎え、買い物と活躍しています。排気ガスが多くマスクをして、月光仮面のような人が多く見受けられます。

さくら日本語センターはダナンで一番大きい日本語センターです。生徒数六百五十名を数え、ベトナム人の教師、常勤・非常勤を含め十名、日本人八名、事務員五名の大所帯です。日本人教師がいることも人気があるようです。



さくら日本語センター教室
立っているのが筆者

ダナンに日本の企業が数社

あり、会社が勉強させてくれ、能力試験三級、二級に合格すると給料もアップするそうです。また通訳、ガイド、日本人と結婚したい、留学したい、日本語が面白いとか動機は様々ですが、十六歳以上の人が来ています。八十歳が女子です。眼をきらきら輝かせながら熱心に取り組んでいます。

一般コースなので朝と夕方、夜の三コースあり授業の終わりは夜九時になります。教室も七つあり、夕方、夜のコースはフル回転で活気があります。

センターにいる限り皆さん日本語が通じるので言葉には不自由しません。が市場に行つて、買い物に困るのでそろそろベトナム語の基礎だけでも勉強しようと思っています。

暑い毎日ですが元気に過ごしています。機会があればぜひ遊びに来てください。お元気で。

(財・日本シルバードラ
ンティアズより派遣)

いまサポーターとして
充実人生！
斎藤富貴子(千葉市)

一九九六〜九八年にブラジルの日系社会で「外国語としての日本語教育」を指導・助言するなかで常に「支援やサポ

ターの在り方」を念頭に活動してきましたが、この二年間の体験が肥しと支えになり現在の生活があると思います。

帰国後は最新の教育情報を得るために放送大学に再入学し、その後設立された「千葉県JICAシニアボランティアの会」に入会、会員としてサポートした外国人家族や孫たちの世話の傍ら現在も学んでいます。そして大学では国際理解と友好を深めたいと立ち上げた同好会で活動し、毎日充実した日々を過ごしています。

楽しみはJICA共催で行われる帰国報告会で、異文化の中で活躍された方々から体験談を伺い、同日に行われる親睦会に出席してさらに詳しく直接伺えることです。



放送大学千葉学習センターで会報作成に従事するサポーター
(中央手前が斎藤会員)

四月から放大・千葉学習センターのサポーターとして登録しました。健康に留意しながら無理せず活動を続けることを願っています。

日本空手協会支援活動

大谷章助(富里市)

日本空手協会から三月十三日付で千葉県本部会員増強育成局 局長を委嘱され、今後二年間に亘り武道空手道の国内普及発展に活動されます。

平和展にペルー活動報告

武藤達雄(柏市)

柏市主催の平和展が三月十九日(金)～二十一日(日)に「さわやかちば県民プラザ」で開催され、ペルーのアレキッパ赴任中の武藤達雄会員の活動報告がパ

ネルになり、展示されました。



「世界とつながる食卓講座」講演

大久保邦衛(浦安市)



スライドで説明の大久保講師(手前)

浦安市が同市国際センターで開催している「世界とつながる食卓講座」の第四回講座が七月二十五日(日)に開かれ、弊会大久保邦衛幹事が、鮭とその素晴らしい一生と人の係りの演題で講演されました。写真、図表を豊富に用いた説明で、我々に馴染み深い、鮭・鱒類の現状、問題点など興味深く、示唆に富んだ内容で参加した市民約二十五名が熱心に聴講しました。



「世界とつながる食卓講座」会場

出前講座実施報告

三月十二日(金)「千葉ふるさと文化大学 生涯学習講座」において、当会白鳥会員が「バナアツでのシニアボランティア活動」の演題で、一時間に及ぶJICA出前講座を実施しました。



熱演中の白鳥講師

自然の中に居るバナアツ人のユーモラスな生活反応に対し戸惑うシニアボランティアの揺れる心の葛藤が窺え、「幸福度指数」世界一のバナアツの話は我々に幸福について考えさせられる楽しい内容で、約百三十名の受講者に感銘を与えました。

当会では出前講座の実施を提案しております。当会ホームページをご覧ください。

JICA関連トピックス

ボランティア秋募集の「体験談&説明会」が始まります

平成二十二年度JICAシニア海外ボランティア(SV)および青年海外協力隊(JV)秋募集の「体験談&説明会」は次の日程、会場で行われる予定です。

船橋会場

十月八日(金)
SV 十五時半～十七時半
JV 十九時～二十一時
船橋市民文化創造館
フェイスペイン六階

JR船橋駅より徒歩二分

幕張会場 (JVのみ)

十月十一日(月・祝日)
JV 十四時～十六時
幕張メッセ国際会議場
JR海浜幕張駅徒歩五分

柏会場

十月十四日(木)
SV 十五時半～十七時半
JV 十九時～二十一時
アミューゼ柏プラザ
JR柏駅東口より徒歩七分

今回は千葉会場はありません。また、シニア海外ボランティアの「体験談&説明会」は、船橋・柏の二会場のみとなっております。

JICA本部・当会定例情報連絡会

本情報連絡会は二カ月毎に地球ひろばにて開催され、連携活動の強化を図るべく、予算、国際理解教育、イベント、講演会、帰国報告会、募集説明会等多くの事柄にわたって意見交換、事務的連絡を行っております。

第十五回定例情報連絡会が八月五日に開かれ、当会からは津田事務局長、新役員の大久保幹事が出席、JICA本部北野次長、小路課長、山本課員らと会談いたしました。

当会から第九回帰国報告会、予算執行状況、今秋参加予定のイベント、および出前講座の計画等について、JICAからは春募集のシニア海外ボランティア応募状況について報告がありました。

帰国報告会に関しては、シニア海外ボランティアの成果を広く伝える一環として、派遣前の自治体への表敬訪問が地元紙等へ掲載されることも多いことから、帰国後の報告会についても自治体への働きかけを促進し、PRに努めたいとのことでした。

今春のシニア海外ボランティア応募者数は、事業仕分け等の影響もあり目標に届かず、また事業仕分けに伴う予算削減により、各事業について厳しい見直しを迫られているとのことでした。

派遣前シニアボランティアが千葉県庁表敬訪問

三月十八日午後、千葉県下の平成二十一年度第四次隊シニアボランティア三名の方々が千葉県庁総合企画部を表敬訪問され、当会津田事務局長が同行しました。



カンボジア、教育政策
千葉県総合企画部長
ケニア、コンピューター技術
ア、コン、渉外促進
ココン、ピア、局長
当会事務局長
JICA千葉デスク

後列左より
篠原温雄 SV 氏
小川雅司 SV 氏
鈴木伸一 SV 氏
鈴木正三 SV 氏
津田麻里子 氏

前列左より
宇井隆浩 氏
安藤洋子 氏
藤本憲一 氏

千葉県国際協力グループ
JICA地球ひろば
千葉県国際室長

JOCA協力隊祭りに参加

四月三日、四日にJICA地球ひろばで開催された「JICAボランティア経験者による第四回協力隊まつり」に当会

はブース参加し、パネル展、資料配布で活動状況をPRしました。



地球ひろば講堂内の当会ブース
(中央) 青年海外協力隊伊藤事務局長

JICAシニアボランティア春募集「体験談&説明会」参加

平成二十二年度シニア海外ボランティア春募集の「体験談&説明会」が柏市と千葉市で実施されました。

○アミューゼ柏プラザ(柏市)
四月六日(火)夕方開催され、約五十名の参加者がありました。



当会からパネリストとして羽関総一郎 会員、樋口徹生氏(非会員)、よろず相談員に羽田 亨 会員、アテンダントに黒田副会長が出席しました。

○京葉銀行文化プラザ(千葉市)
四月十日(土)午前に開催され、約四十名の参加者でした。



当会からパネリストとして武松 敏弼、大久保 邦衛 両会員、よろず相談員に浦山 和良 会員が、アテンダントに品川 会長が参加しました。
○ホテルニューオータニ幕張(千葉市)
四月十九日(月)にサンケイリビング新聞社千葉主催のイベント「To THE NEXT 2010 次

の私を考える」があり、JICAが特別企画「シニア海外ボランティア特別募集説明会」を行いました。当会は体験談発表、シニアボランティア応募相談に水野 純也、羽関 総一郎 両会員が担当しました。後藤幹事が補助を務めました。



CCB 便り



皆様こんにちは
四月に着任したJICA千葉デスク国際協力推進員の明石絵里子と申します。私は今年一月までキルギス共和国で青年海外協力隊として活動しておりました。
キルギス共和国は中央アジアのスイスと言われるように、水資源が豊富で三千級級の素晴らしい山々で囲まれた国です。日本での知名度は非常に低いですが、キルギスでは「日本人とキルギス人は元々兄弟だった」という話が有名です。肉を好む者が西へ、魚を好む者が東へと移動していったのだと、日本人とそっくりな顔つきのキルギス人が力説するので納得してまいります。
そんな国キルギスで、私は日本文化紹介のイベントの企画・運営に携わっていました。中でも盆踊り大会は国境もお金の有無も関係なく誰もが笑顔で踊ることができるとして大変盛り上がり、その感動が今でも胸に焼き付いています。
今後はシニアボランティア

の会の皆様と協力しながら、千葉県から途上国に温かい支援を行うお手伝い出来る様努力していく所存です。どうぞ末永く宜しくお願い致します。

編集後記

毎年の事ですが、夏の暑さが身に堪えます。ことに今年は酷暑となり、SVニュースを編集するのも大変でした。皆様にはお変わりございませんか。
今年ワールドカップと参議院選挙があり、そのための寝不足も祟りました。
お蔭様で記事が集まり、脱稿にたどり着く事が出来ました。ホツとしております。

誤植のお詫び

前号五頁に寺戸 康隆 会員の「会員活動」記事を掲載しましたが、お名前に誤植がありました。ここに詫言ひして、訂正いたします。

ご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
043-255-3810 (山本)
Shigeho_yamamoto@yahoo.co.jp
千葉デスク国際協力推進員
043-297-0245 (明石)
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp